弁言

昭和二十八年四月、京都の堀川高等学校に職を得て以来、校内の発行物に駄文を綴ることが私の仕事の一つになった。職場を転じた後も、筆を走らせることに明け暮れて、今日に至った。その間に消耗した原稿用紙は数えがたい。顧みて汗顔に堪えぬ仕儀と言わざるを得ない。

この度、蕪稿を纏めて上梓することになった。散逸した稿もあったが、長友千代治氏、川戸恵氏の援けを得て揃えることができた。篤く御礼申し上げる。

若書きの多くは没却したが、なおその時代の一面を伝えると思われるものは、鶏肋といえども拾い入れた。京都に関しては、町の情況が執筆当時とかなり異なっていることが少なくない。その他の稿についても、時勢も学説も移り私の考えの変った場合もある。しかしながら、それらも昔年の証言として敢えて書き改めず、初出の年月日を記し、適宜注記をもって補うことにする。

稿を分けるに、「京都の国文学的検討」「諸学連環国文辨説」「国語国文学芻論」と題した。ただし、紙数によって按分したまでで、題名に相応しない稿もある。

周甲に亙り私が学びかつ講じて来たのは国語学国文学である。しかしながら、私の歩いたのは、本街道を逸れた脇道、裏道であった。すなわち需めに応じて書いたものも、自ら思いついて書いたものも、概ね雑学という謗りは免れぬであろう。

小学生の頃、兵隊ごっこや草野球の仲間に加ったのは、友達づきあいで已むを得なかったからである。私の心から愉しい時間は、昆虫や植物の採集、観察、あるいは魚を掬って飼育する時であった。その後、思うところあって殺生は止めたけれども、三つ児の魂はなお抜けない。昭和五十五年以来、動植物に関する見聞を書き留め、「花鳥年中誌」と題して京都外国語大学の研究誌「コスミカ」に連載し、爾後も記録を続けている。また、「観鳥の記」なるものを小会報に連載したこともある。自然観察に益すること少なからずといささか自讃する記録ではあるが、厖大な紙数を要するので、この度は割愛せざるを得なかった。

昭和二十五年、笈ならぬリュックサックを負うて京都に来て、お上りのもの珍しさから名所旧蹟を尋ね歩いた。七月二日金閣寺炎上、その前日、奇しくも最後の姿を観るという偶然もあった。京都探索が嵩じて、昭和四十九年十一月、講談社から『京都歴史案内』を出版するに至った。それからというもの、京都について書けとの注文がしばしばあり、菲才浅学を顧みず、筆を執らざるを得ぬはめに陥った。

さような次第で、脇道に趨る習いが性となったのである。また、刊行継続中の『近代戦争文学事典』にしても、国文学研究の裏道を往くものであろう。

事の勢いで、諸学連環の旗幟を掲げたものの、私は国語学国文学の徒であって、その閾を出ることは所詮能わぬ話である。それでも、斯道に一簣の土を積むことができれば幸としよう。なお、誕妄の説あらば、諸賢の批正を受けるに吝かでない。

平成二十八年宜春

矢野貫一

目次

序……京都大学名誉教授　浜田啓介　(1)
弁言……矢野貫一　(3)

Ⅰ　京都の国文学的検討

一　山河襟帯……3
二　大覚寺沿革……13
三　河原院……19
四　中川考……24
五　棚の宮由緒……37
六　釘抜地蔵尊……49

七　洛北洛西の古い道をたどる……56
八　平安住所録……66
九　東山三十六峰……82
十　地図以前の上御霊社……100
十一　庭園の変容……108
十二　龍安寺の虎の子渡し……123
十三　大原雑喉寝そらごとの説……125
十四　三宅八幡信仰記……137
十五　島原　西風競わず……160
十六　『朱雀遠目鏡』解題……165
十七　祇園町……169
十八　祇園東新地……175
十九　京の味ごよみ——食慾優先京風俗（はなよりだんごみやこのてぶり）……181

二十　懸想文売り……187
二十一　粟島堂の句碑……201
二十二　重衡のこと……202
二十三　洛陽八拾八ケ所箋注……205
二十四　木屋町三条上る——佐久間象山のこと……258
二十五　霊山展墓——吉村寅太郎……265
二十六　療病院抄録——明石博高……273

II　諸学連環国文辨説

一　海幸山幸——農耕社会の肉食……281
二　鳥自ら呼ぶ……289
三　坂鳥考……311
四　ほととぎすの虚実……319

五　和歌におけるちどり誌……335
六　みやこどり考……351
七　ゆりかもめ二十六年史……355
八　秧鶏（クイナ）異変……358
九　二条の院の家ばと……362
十　素菟攷……376
十一　蝸牛は廻う……406
十二　獺祭記（かわうそざつき）……419
十三　あららぎの辨……428
十四　あふひ攷……438
十五　冬葵に邂う……453
十六　弓月が嶽に雲立ち渡る……460
十七　俳諧と動植物——おくのほそ道の虚実……476

十八　弥生末の七日の有明……480
十九　石山の石は白いか……484
二十　室津のむかし……499
二十一　東本願寺再建木遣歌聞書（ひがしほんがんじさいこんきやりうたききがき）……506
二十二　慾斎九々の書私按……514
二十三　『絵本大人遊』解題……521

Ⅲ　国語国文学芻論

一　うたがきの説……527
二　萬葉集巻十七以下における排列と生物暦……546
三　寛平四年忠臣歿す……569
四　朝顔斎院の墓の実否……576
五　夕顔の墓と朝顔の墓……588

六　光源氏二十一歳三十歳の年について……594
七　雲がくれ六帖の誤写について……601
八　柳多留の中の源氏物語……609
九　紫式部供養塔劄記……624
十　つれづれ草の風土……630
十一　昔話の喪失……697
十二　神様の座――志賀直哉試論……699
十三　技倆と精神と――開高健試論……712
十四　わが辞典に完成なし――あとがきに代えて……720
編集後記……奈倉洋子　725
索引……左1

※各論考の発表媒体は諸種にわたるが、原則として、初出時の表記法に拠った。